

中上級日本語学習者における映像コンテンツの活用



<https://doi.org/10.24412/2181-1784-2026-21-84-88>

イブラギモヴァ・マリカ

日本語学科准教

授

ウズベキスタン国立世界言語大学

[ibragimova\\_malika@yahoo.com](mailto:ibragimova_malika@yahoo.com)

要約

本研究は、中上級日本語学習者を対象に、映像コンテンツの活用の有効性を検討するものである。従来の教科書中心の授業には、特に発話能力の向上において限界があると指摘されている。本稿では、公開映像資料を用いた段階的指導法を提案した。実践の結果、語彙習得、聴解力および発話能力の向上が確認された。さらに、真正性の高い映像資料に対する心理的障壁の軽減にも寄与することが明らかとなった。

**キーワード：**ウズベキスタンにおける日本語教育、真正性の高い映像コンテンツ、中上級学習者、発話能力、聴解力、学習意欲

ABSTRACT

*This study examines the effectiveness of using video content for upper-intermediate and advanced learners of Japanese. Traditional textbook-based instruction has limitations, particularly in improving speaking skills. This paper proposes a step-by-step instructional method using publicly available video materials. The results demonstrate improvements in vocabulary acquisition, listening comprehension, and speaking ability. Furthermore, the approach contributes to reducing psychological barriers toward authentic video materials.*

**Keywords.** *Japanese language education in Uzbekistan, authentic video content, upper-intermediate and advanced learners, speaking skills, listening comprehension, learning motivation*

1. はじめに

現代ウズベキスタンの教育制度において、外国語教育は初等教育から高等教育に至るまで重要な位置を占めている。2012年の大統領令に基づき、2013年以降、CEFRに準拠した外国語能力評価の国家試験制度が導入された。さらに、2022/2023年度以降、言語学および外国語分野の修士課程・博士課程への進学には、C1レベル以上の語学証明書の取得が必須条件となって

いる。このことから、語学系高等教育機関の卒業時まで C1 レベルの語学証明書を取得していることが求められるようになった。

日本語能力試験 (JLPT) とは異なり、当該国家試験は CEFR と同様に、聴解・読解・作文・会話の 4 技能を総合的に評価するものである。情報技術の発展により、聴解・読解・作文は自律的に習得可能となっている一方で、発話能力の習得には実践的な練習機会が不可欠である。

しかしながら、現状では教科書中心の授業が主流であり、オーディオ・リンガル・メソッドに依拠した文法・語彙指導が中心となっている。その結果、学生は短文レベルでの理解および表現には習熟しているものの、まとまりのある発話を行う能力には依然として課題が残されている。

## 2. 本論

外国語習得においては、言語環境への没入が最も効果的であるとされている。現代においては、インターネットを通じた映像資料の活用により、疑似的な言語環境を構築することが可能となっている。

また、現代の学習者はデジタル環境に親しんだ Z 世代に属し、視覚情報を重視する傾向がある。このような特性を踏まえると、映像コンテンツの活用は極めて有効な教育手段であると考えられる。

本研究の目的は、中上級レベルの日本語学習者に対する映像コンテンツの効果的な活用方法を提示し、その教育的有効性を検証することである。

映像コンテンツの活用は、初年次から導入することが望ましいと考えられる。これは、新出語彙の学習において正確な発音の形成に寄与するためである。実際には、日本語の発音誤りは、現地教員が十分な音声学的訓練を受けていないことに起因する不正確な音声モデルによって形成される場合が少なくない。

このため、新出語彙の指導は、日本語母語話者の関与のもとで行うか、あるいは一般に公開されている日本の代表的な教科書に基づいて作成された教育用映像コンテンツを活用することが望ましい。

また、学生に対して語彙学習用の映像資料を事前に提供し、授業内では口頭試問や筆記によるミニテストなど、多様な方法によって習得状況を確認することが有効である。

さらに、授業外においても、学生の興味関心に応じた日本語の映像コンテンツを用いた体系的な自律学習を促進する必要がある。しかしながら、真正性の高い映像資料は学習者にとって理解が困難である場合が多い。そのため、学習者の言語的障壁の軽減を目的として、以下の段階からなる映像活用法を開発した。

### 指導法

本研究では、以下の 5 段階からなる映像活用モデルを提案する。

### 第1段階（事前準備）

第1段階は、授業前の家庭における事前準備段階である。各授業において、あらかじめ定められた順序に従い、学生1名に対して1～2分程度の映像資料を選定する課題を課す。選定する映像はニュース素材であることが望ましいが、必ずしもこれに限定されない。

映像資料の選定にあたっては、以下の基準を設ける。

第一に、内容の時事性を確保するため、公開から6か月以内の比較的新しい映像であること。

第二に、日本の社会的・文化的背景に関する理解を促進する観点から、日本国内で撮影され、日本に関連する内容を扱っていること。

第三に、当該映像がAIによって生成されたものではないこと。

学生による自主的な映像選定は、学習者の日本語能力および関心に適合した教材選択を可能にする。また、最終的な映像を決定する過程において多様な資料を視聴すること自体が、自律的学習の重要な一環となる。

一方で、学習者が自身の能力水準に対して過度に難易度の高い、あるいは低い映像を選択する場合や、背景知識の不足により内容理解が困難となる場合も見られる。そのため、選定した映像については、事前に教員と相談・確認を行うことが望ましい。

担当学生は、新出語彙のリストを訳語とともに作成し、映像リンクと併せてTelegramグループに共有する。他の学生は授業前に語彙を確認し、映像を繰り返し視聴することで内容理解を深めることが求められる。

### 第2段階（導入）

第2段階は、授業内における映像コンテンツ学習のための導入段階である。まず、映像資料の選定を担当した学生が新出語彙の説明を行う。教員は必要に応じて補足説明を加え、語彙の使用例などを提示することもある。

その後、教員が映像資料を通して一度視聴させ、全体的な内容把握を目的とした初回視聴を行う。視聴後、教員は学生に対して映像の内容について質問を行う。回答は日本語または母語のいずれでも可とする。質問内容は主に、ニュース理解において基本となる「何が」「どこで」「いつ」起こったのかといった点に焦点を当てる。

なお、初回視聴の段階では、学習者が一部の語彙や内容を十分に理解できていない、あるいは誤解している場合も見られる。そのような場合には、次の段階において理解を深める機会を設ける。

### 第3段階（精査的視聴）

第3段階は、本研究における中核的段階であり、授業内における映像資料の詳細な理解を目的とする。教員は映像コンテンツを意味的な単位ごとに分割しながら視聴を行う。各セグメントの視聴後、学生に対して日本語で内容を自らの言葉で再述するよう求める。

必要に応じて、当該部分の内容が十分に理解されるまで繰り返し視聴を行い、文脈に基づいた語彙の解説および確認を行う。

なお、本段階においては、映像資料の準備を担当した学生が補助的役割を担う。他の学生が回答できない場合には、教員は当該学生に対して説明を求める。

#### 第4段階（評価①）

第4段階は、授業内における評価段階である。映像資料の詳細な分析が終了した後、ペアワークを実施する。学生は新出語彙および表現を用いながら、視聴した内容を簡潔に相互に説明することが求められる。

その後、個別発表による理解度の確認を行う。時間の許す限り、できるだけ多くの学生に発言の機会を与えることが望ましい。

#### 第5段階（評価②）

第5段階は、次回の授業において実施される評価段階であり、新出語彙の定着度を確認することを目的とする。教員は、前回視聴した映像資料から使用頻度の高い語彙を10語選定する。

評価活動として、学生に対し、これらの語彙の訳語を5分以内に記述する小テストを実施する。

その後、答案回収後に口頭による確認を行い、学生が順に自身の解答を発表する。最終的な評価結果は、次回の授業において学生に提示される。

### 3. 考察

本手法の適用は、学習者の口頭能力の形成において有効性を示している。週1回の授業頻度において、1学期（約4か月）という比較的短期間であっても、語彙量の顕著な増加、対象言語に関する背景知識の拡充、聴解力の向上、および発話能力の発達が確認された。

また、真正性の高い映像資料を活用することにより、学習者は自然な発話を理解するとともに、文化的に規定された要素やイントネーションの特徴、さらには言語行動の規範に触れることが可能となる。

さらに、本手法の重要な成果の一つとして、真正性の高い映像コンテンツに対する心理的障壁の低減および不安の軽減が挙げられる。映像資料の段階的導入と継続的な活用は、学習者に

自己の言語運用能力に対する持続的な自信を形成させ、それが学習成果の向上に寄与する可能性が示唆される。

#### 4. 結論

本研究の結果、中上級レベルの日本語教育における真正性の高い映像資料の活用は、学習者の言語運用能力の発達に有効であることが明らかとなった。提案した段階的指導法は、映像コンテンツを用いた学習活動の体系化を可能にし、聴解力および発話能力の持続的な向上を促進するものである。

さらに、本手法は現代教育の要請に即し、学習者における真正性の高い資料を用いた自律的学習能力の形成を促進するとともに、学習意欲および自己研鑽への志向の向上にも寄与することが示唆される。

以上より、本研究は、語学系高等教育機関における映像資料の教育的活用の有効性を示すものである。

#### 参考文献

1. Ivashkina, O.A. (2022). Использование видеоматериала на занятиях по иностранному языку. *Мир науки, культуры, образования*, 6 (97).
2. Obara, R. (2007). 『日本語教育における学習素材としての映像メディア—映画・テレビ番組の教材化—』.
3. Pushkareva, I.A. (2021). Использование видеоматериалов при обучении иностранному языку как способа интенсификации учебного процесса. *Теория и практика социогуманитарных наук*, 1 (13).
4. Shimizu, M., Hirata, Y., & Arita, K. (2024). ニュース動画と発問を用いた日本語教育実践—留学生必修日本語科目のカリキュラム改善をめざし—. *高等教育開発センターフォーラム*, 11, 83–90.